

「お弁当の日」を考える

園長 鈴木 勝子

本日、アドベント・クランツのろうそくに一つめの灯がつけました。アドベントとは「近づく」「到来する」というラテン語からきています。救い主イエスの最初の到来（誕生）を待ち望む、準備の期間です。十二月になると保育室ではアドベントカレンダーを一枚一枚めぐりながらクリスマスの絵本を見たりツリーの飾りを増やしたりと園全体でクリスマスの準備を進めます。今年も子ども達とワクワクしながらクリスマスを待ちたいと思います。

さて、十一月九日に行われた、保護者会とこども園との協賛による育児講演会にたくさんの方がご参加くださいました。今年度の育児講演会では、当園でかなり以前から実施しているお弁当の日の目的やねらい、何のために行うのか？保護者の皆さまと共に改めて考える機会となれば、と共同通信社の「弁当の日」応援プロジェクトに応募しました。同社より助成をいただくことが出来、テレビ出演や数多くの著書を出されている「子どもが作る‘弁当の日’」の提唱者で元小・中学校の校長先生の竹下和男先生をお招きすることができました。皆さまからいただいた講演会の感想の一部を右下欄に紹介させていただきました。講演会の翌週のお弁当の日には「おにぎり自分で作った。」「自分でお弁当箱に詰めた。」「卵焼きお母さんと作った。」等々子どもたちから嬉しいお話を聞くことができました。

簡単ですが私が心に響いた内容をご紹介します。先生は小学校で「親は手伝わない、子どもが献立から買い出し、調理、弁当箱詰め、片づけまで全部、自分一人で行う‘弁当の日’」を実践され、十八年間子どもたちが弁当を食べている写真を撮られました。低学年の時に羨ましそうに先輩の作ったお弁当をのぞき込んでいた子が、4、5年後に先輩となり、後輩の前で誇らしげにお弁当を食べ、またその後輩が羨ましそうに見つめています。つまり、子どもの成長には身近な憧れの存在が必要で、これは先輩から後輩ということだけでなく「親から子どもへ、そしてまたその子どもへ」という世代間の繋がりにもなる。つまり子育てが、百年先の未来の家族に繋がっている、ということでした。また、子どもが健やかに育つためのピラミッド型の三つの時間のお話も印象的でした。**家族と共に過ごす衣食住に関わる**

「**くらしの時間**」は人格形成の基礎づくりとなります。「くらしの時間」が土台となって、大人のいない屋外で年齢の違う子どもたちが群れになってあそび、**社会性を身につける「あそびの時間」**があり、その上に社会に貢献できる自己を作るための時間で、**学校教育となる「まなびの時間」**があります。「まなびの時間」には評価があり、優劣がつき、ストレスがかかります。強すぎるストレスは「あそびの時間」や「くらしの時間」に吸収・解消してもらうことができますが、「まなびの時間」が大きくなりすぎると頭でっかちで、子どもが人間の子どもとして育ちにくくなるということでした。

0～6歳の就学前の今の時期は、家族とともに過ごす「くらしの時間」、友達と過ごす「あそびの時間」にあたります。先生のお話は、ひかりの子の保育・教育と通じる部分がたくさんあると感じました。当園で長年続いている「お弁当の日」は子どもの健やかな育ちに重要な関わりを持つことを、保護者の皆さまと改めて確認することができました。

講演会で話された内容は以下のサイトでご覧になれます。<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/368301.html>